

## 家庭学習応援教材

永井荷風「すみだ川」を読む

関西学院大学 神学部・商学部・教育学部・国際学部・総合政策学部 2013 過程の演習 新国語  
問題集アシスト【現代文編】

次に挙げる文章のうち、「甲」は明治時代の後半に永井荷風によって書かれた小説『すみだ川』の一節で、長吉が隅田川の畔の今戸橋で幼馴染のお糸と待ち合わせる場面である。長吉の母親は、一人息子を「立派な月給取り」にさせたいと願って彼を学校に通わせているのだが、長吉は学業にあまり身が入らない。というのも、小さい頃から踊りが上手かったお糸が、彼女自身の乗り気も手伝って、芸者になるために霞町へ出ることが決まったからである。また、「乙」の方は、この小説が後に単行本に収録された際に永井荷風が付した序文である。それぞれを読んで、後の問に答えなさい。

### 〔甲〕

長吉は先刻から一人ぼんやりして、或時は今戸橋の欄干に凭れたり、或時は岸の石垣から渡場の棧橋へ下りて見たりして、夕日から黄昏、黄昏から夜になる河の景色を眺めていた。今夜暗くなって人の顔がよくは見えない時分になったら今戸橋の上でお糸と逢う約束をしたからである。しかし丁度日曜日に当って夜学校を口実にも出来ない処から夕飯を済すが否やまだ日の落ちぬ中ふいと家を出てしまった。一しきり渡場へ急ぐ人の往来も今では殆ど絶え、橋の下に夜泊りする荷船の燈火が慶養寺の高い木立を倒に映した山谷堀の水に美しく流れた。門口に柳のある新しい二階家からは三味線が聞えて、水に添う低い小家の格子戸外には裸体の亭主が涼みに出はじめた。長吉はもう来る時分であろうと思つて一心に橋向うを眺めた。

最初に橋を渡つて来た人影は黒い麻の僧衣を着た坊主であった。つづいて尻端折の股引にゴム靴をはいた請負師らしい男の通つた後、暫くしてから、蝙蝠傘と小包を提げた貧し気な女房が日和下駄で色気もなく砂を蹴立てて大股に歩いて行つた。もういくら待つても人通りはない。長吉は詮方なく疲れた眼を河の方に移した。河面は先刻よりも一体に明るくなり気味悪い雲の峯は影もなく消えている。長吉はその時長命寺辺の堤の上の木立から、他分旧暦七月の満月であらう、赤味を帯びた大きな月の昇りかけているのを認めた。空は鏡のように明いのでそれを遮る堤と木立はますます黒く、星は宵の明星の唯た一つ見えるばかりでその他は尽く余りに明い空の光に掻き消され、横ざまに長く棚曳く雲のちぎれが銀色に透過つて輝いている。見る見る中満月が木立を離れるに従い河岸の夜露をあびた瓦屋根や、水に湿れた棒杭、満潮に流れ寄る石垣下の藻草のちぎれ、船の横腹、竹竿などが、逸早く月の光を受けて蒼く輝き出した。忽ち長吉は自分の影が橋板の上に段々に濃く描き出されるのを知つた。通りかかるホーカイ節の男女が二人、「まア御覧よ。お月様。」といつて暫く立止つた後、山谷堀の岸辺に曲るが否や当付がましく、

「書生さん橋の欄干に腰打かけて――」

と立ちつづく小家の前で歌つたが金にならないと見たか歌いも了らず、元の急足で吉原土手の方へ行つてしまった。

長吉はいつも忍会の恋人が経験するさまさまの懸念と待ちあぐむ心のいらだちの外に、何とも知

れぬ一種の悲哀を感じた。お糸と自分との行末……行末というよりも今夜会って後の明日はどうなるのであろう。お糸は今夜兼てから話のしてある葭町の芸者屋まで出掛けて相談をして来るといふ事で、その道中をば二人一緒に話しながら歩こうと約束したのである。お糸がいよいよ芸者になってしまえばこれまでのように毎日逢う事ができなくなるのみならず、それが万事の終りであるらしく思われなければならない。自分の知らない如何にも遠い国へと再び帰る事なく去ってしまうような気がしてならないのだ。今夜のお月様は忘れられない。一生に二度見られない月だなアと長吉はしみじみ思った。あらゆる記憶の数々が電光のように閃く。最初地方町の小学校へ行く頃は毎日のように喧嘩して遊んだ。やがては皆なから近所の板塀や土蔵の壁に相々傘をかかれて嘩された。小梅の伯父さんにつられて奥山の見世物を見に行ったり池の鯉に麩をやったりした。

三社祭の折お糸は或年踊屋台へ出て道成寺を踊った。町内一同で毎年汐干狩に行く船の上でもお糸はよく踊った。学校の帰り道には毎日のように待乳山の境内で待合せて、人の知らない山谷の裏町から吉原田圃を歩いた……。ああ、お糸は何故芸者なんぞになるんだらう。芸者なんぞになっちゃいけないと引止めたい。長吉は無理にも引止めねばならぬと決心したが、すぐその傍から、自分はお糸に対しては到底それだけの威力のない事を思返した。果敢ない絶望と諦めとを感じた。お糸は二ツ年下の十六であるが、この頃になつては長吉は殊更に日一日とお糸が遙か年上の姉であるような心持がしてならぬのであった。いや最初からお糸は長吉よりも強かった。長吉よりも遙に臆病ではなかった。お糸長吉と相々傘にかかれて皆なから嘩された時でもお糸はびくともしなかった。平気な顔で長ちゃんはおたいたいの旦那だよと怒鳴った。去年初めて学校からの帰り道を待乳山で待ち合わせようと申出したのもお糸であった。宮戸座の立見へ行こうといったのもお糸が先であった。帰りの晩くなる事をもお糸の方がかえって心配しなかった。知らない道に迷つても、お糸は行ける処まで行つて御覧よ。巡查さんにきけば分るよといって、かえって面白そうにずんずん歩いた……。

あたりを構わず橋板の上に吾妻下駄を鳴す響がして、小走りに突然お糸がかけ寄った。

「おそかったでしょう。気に入らないんだもの、母さんの結った髪なんぞ。」と駆け出したために殊更ほつれた鬢を直しながら、「おかしいでしよう。」

長吉はただ眼を円くしてお糸の顔を見るばかりである。いつもと変りのない元気のいいはしやぎ切った様子がこの場合むしろ憎らしく思われた。遠い下町に行つて芸者になつてしまうのが少しも悲しくないのかと長吉はいいたい事も胸一ぱいになって口には出ない。お糸は河水を照す玉のような月の光にも一向気のつかない様子で、

「早く行こうよ。私お金持ちだよ。今夜は。仲店でお土産を買つて行くんだから。」とすたすた歩きます。

〔乙〕

小説『すみだ川』を草したのはもう四年ほど前の事である。外国から帰つて来たその当座一、二年の間はなおかの国の習慣が抜けないために、毎日の午後といえれば必ず愛読の書をふところにして散歩に出掛けるのを常とした。しかしわが生れたる東京の市街は既に詩をよるこぶ遊民の散歩場ではなくて行く処としてこれ戦乱後新興の時代の修羅場たらざるはない。その中にもなおわすかにわが曲りし杖を留め、疲れたる歩みを休めさせた処はやはりいにしへの唄に残つた隅田川の両岸であった。隅田川はその当時目のあたり眺める破損の実景と共に、子供の折に見覚えた靡ろなる過去の景色の再

来と、子供の折から聞伝えていたさまさまの伝説の美とを合せて、いい知れぬ音楽の中に自分を投入したのである。既に全く廃滅に帰せんとしている昔の名所の名残ほど自分の情緒に対して一致調和を示すものはない。自分はわが目に映じたる荒廢の風景とわが心を傷むる感激の情とを把つてここに何物かを創作せんと企てた。これが小説『すみだ川』である。さればこの小説一篇は隅田川という荒廢の風景が作者の視覚を動したる象形的幻想を主として構成せられた写實的外面の芸術であると共にまたこの一篇は絶えず荒廢の美を追究せんとする作者の止みがたき主觀的傾向が、隅田川なる風景によつてその抒情詩的本能を外発さすべき象徴を搜めた理想的内面の芸術ともいい得よう。さればこの小説中に現わされた幾多の叙景は篇中の人物と同じく、否時としては人物より以上に重要な分子として取扱われている。それと共に篇中の人物は實在のモデルによつて活ける人間を描写したのではなくて、丁度アンリイ、ド、レニエエがかの『賢き一青年の休暇』に現したる人物と齊しく、隅田川の風景によつて偶然にもわが記憶の中に蘇り来つた遠い過去の人物の正に消え失せんとするその面影を捉えたに過ぎない。作者はその少年時代によく見馴れたこれら人物に対していかなる愛情と懐しさを持つてゐるかは言うを俟たぬ。今年花また開くの好時節に際し都下の或新聞紙は澤上の桜樹漸く枯死するもの多きを説く。ああ新しき時代は遂に全く破壊の事業を完成し得たのである。さらばやがてはまた幾年の後に及んで、いそがしき世は製造所の煙筒叢立つ都市の一隅に當つては時鳥鳴き蘆の葉ささやき白魚閃き桜花雪と散りたる美しき流のあつた事をも忘れ果ててしまふ時、せめてはわが小さきこの著作をして、傷ましき時代が産みたる薄倖の詩人がいにしえの名所を弔う最後の声たらしめよ。

(注) \*請負師：土木・建築工事などの請負の仕事を専門に行う人。

\*ホーカイ節：三味線などの楽器を携え法界節と呼ばれる歌を歌いながら旅して回る芸人。

\*葭町：隅田川下流にある町名で、明治時代に花街として発展した。

\*小梅の伯父さん：長吉の伯父で、隅田川をはさんで彼の家とは対岸の小梅瓦町に住んでいる。

\*道成寺：江戸時代に創られ人気を博した歌舞伎舞踊、および長唄の一つ。

\*仲店：社寺の境内や参道にある土産物を売る商店街。ここでは二人の家にほど近い浅草寺の仲店を指している。

\*戦乱：ここでは日露戦争のこと。

\*アンリイ、ド、レニエエ：十九世紀後半から二十世紀初めにかけて活躍したフランスの詩人、小説家。

\*澤上：隅田川の畔、隅田川沿い。

問 傍線部「隅田川の風景によつて偶然にもわが記憶の中に蘇り来つた遠い過去の人物の正に消え失せんとするその面影」とあるが、「甲」に登場する長吉のどんところがそれにあてはまるといえるか。最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ 自分の生まれ育つた土地への愛着を持ちながらも、新たな世界に向かって旅立とうとしているところ

ロ 学業もなにかも放擲して、運命的な出会いをなした人とともに生きていこうと決意しているところ

ハ 河面を照らす月に心を傾けて、自分の中に生じる悲愁をいっそう深くかみしめていくところ  
ニ 裸体の亭主が夕涼みするような生活習慣に馴染めず、過去の追憶の中に逃れようとしているところ

ホ 自分が臆病なことを自覚するがゆえに、自分の心をむなしくして恋人の心変わりを待ち続けるところ

【解説】

◇本文の構成

〔甲〕本文

お糸を待つまでの思い

お糸がやって来てからの思い

〔乙〕序文

【解答】

ハ

まず、傍線部を言い換えている直後の表現をおさえよう。「作者」の「少年時代によく見馴れたこれら人物」である。しかも傍線部に「隅田川の風景によって」とあるので、選択肢の中に隅田川の情景が必要である。隅田川の風景に触れているのはハとニ。ところがニはそれに「馴染めず」とあるので、隅田川への筆者の愛情とは矛盾するので×。